慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

慶應医学部 1部門優勝、3部門準優勝！

第68回東医体

第68回東日本医科学生総合体育大会（東医体）夏季部門が開催された。医学部体育会の多くの部活が、東医体に向けて厳しい練習を重ねてきた。その成果を発揮すべく、各地で熱戦が繰り広げられた。

東医体は、各競技の順位に応じたポイントが大学に付与され、その合計点で総合優勝校を争うシステムとなっている。今大会において、弓道部が優勝、硬式庭球部、ヨット部、端艇部の3部門で準優勝となった。さらに、ゴルフ部、水泳部、ハンドボール部の3部門が第3位となった。そのほかの多くの部門でポイント獲得を成し遂げた。

今月号では、好成績を収めた部活の主将に行ったインタビューをお届けする。選手たちの熱く淡くほろ苦いひと夏の1ページを読者の皆様にお伝えすることができれば幸いである。

（5年　梅原千里）

競技	性別	1位（優勝）	2位（準優勝）	3位
卓球	男子	筑波大学	北海道大学	東京大学
	女子	東北医科薬科大学	福島県立医科大学	順天堂大学
剣道	男子	山形大学	東海大学	北里大学 自治医科大学
	女子	筑波大学	山形大学	横浜市立大学 福島県立医科大学
硬式テニス	男子	千葉大学	慶應義塾大学	秋田大学
	女子	福島県立医科大学	聖マリアンナ医科大学	東海大学
柔道	男子	東海大学	防衛医科大学校	東京慈恵会医科大学 筑波大学
	女子	自治医科大学	杏林大学	獨協医科大学 旭川医科大学
馬術		東京慈恵会医科大学	山梨大学	東京医科大学
ソフトテニス	男子	東北大学	群馬大学	信州大学
	女子	福島県立医科大学	岩手医科大学	秋田大学
空手	男子	自治医科大学	弘前大学	順天堂大学
	女子	新潟大学	自治医科大学	埼玉医科大学
バドミントン	男子	秋田大学	新潟大学	防衛医科大学 弘前大学
	女子	自治医科大学	岩手医科大学	福島県立医科大学 北里大学
陸上	男子	筑波大学	群馬大学	新潟大学
	女子	筑波大学	防衛医科大学校	山形大学
ヨット		日本医科大学	慶應義塾大学	千葉大学
弓道		慶應義塾大学	秋田大学	新潟大学
硬式野球		順天堂大学	東京医科大学	信州大学
ボート		自治医科大学	慶應義塾大学	山梨大学
ラグビー		旭川医科大学・札幌医科大学 北海道大学合同チーム	信州大学	
水泳		自治医科大学	群馬大学	慶應義塾大学
ハンドボール		筑波大学	信州大学	慶應義塾大学
バレーボール	男子	秋田大学	順天堂大学	山形大学
	女子	日本大学	杏林大学	東邦大学
バスケットボール	男子	新潟大学	弘前大学	昭和医科大学
	女子	信州大学	順天堂大学	日本医科大学
ゴルフ	男子	日本大学	獨協医科大学	慶應義塾大学
	女子	聖マリアンナ医科大学	東京慈恵会医科大学	獨協医科大学
サッカー		筑波大学	東北大学	山形大学

弓道部

2年ぶり悲願の団体優勝

いざ、出陣

昨年度は団体戦第3位と惜しくも2連覇を逃し、王者奪還を目指して練習を重ねてきた弓道部。リベンジを胸に臨んだ今年の東医体、計120射80中で見事優勝を成し遂げた。

2立目で3人が皆中を出し首位に躍り出るも、最終立を残して1位の秋田大学を2位の慶應がわずか1本差で追いかける接戦に。迎えた最終立の最後の4本目、6人中3人がこの1本を中てれば優勝が決まるという場面。勝負の行方は主将の高柳優太君（4年）の最後の1本に任された。部員全員が息を呑んで見守る中、集中を切らさず矢を放ち、見事に的を射抜いて優勝をつかみ取った。高柳君は、「選手全員が自信を持って臨んだ結果だと思う。小さな1本の積み重ねがここまで大きな成果に繋がるということを改めて実感した」と試合を振り返った。また、男子個人戦では長瀧稀慧君（2年）が準優勝、倉持裕基君（4年）が第6位、高松康介君（3年）が第9位、女子個人戦では後藤恵理子君（3年）が第5位を獲得。さらに、高柳君には射技優秀賞が授与され、慶應の選手層の厚さを存分に示した。次の目標は3年連続の出場となる全医体。東日本の王者として悲願の全医体優勝を成し遂げてくれることを期待したい。

（3年　永田みのり）

緊張の最終立

硬式庭球部

男子団体準優勝

8月1日から6日にかけて、山中湖東照館テニスコートにて行われた東医体において、硬式庭球部男子が2年ぶりの準優勝を果たした。スローガン「一蓮托生」のもと、チーム力を磨いてきた男子部は、昨年の3位から一歩前進。準決勝に至るまでの4大学との対戦では、3対0のストレート勝ち、準決勝の東京科学大学との対戦では3対1での勝利を収め、圧倒的な強さを見せつけた。

女子部は初戦で山梨大学に3対0でストレート勝ちを収め、2回戦では前年度優勝校・日本大学に1対2と惜しくも敗れたものの、健闘を見せた。

男子部主将・叙物蒼太君（5年）は、「関東医科歯科リーグでは優勝を逃し、思うような結果を残せるか不安な中の東医体となりました。負けたら終わりのトーナメントの中、1試合目から選手、サポーターが全力を出しながら、完璧な形で決勝戦まで進みました。宿敵千葉大学との決勝戦、最高の舞台でチーム全員が全力を尽くしながら、惜しくも敗戦となりました。来年はこの悔しさを胸に、優勝目指してまた頑張りたいと思います。」と語る。

選手たちの健闘を称えるとともに、今後の更なる飛躍に期待したい。

（2年　横井美咲）

難敵慈恵大勝利の瞬間

エース鳴戸の集大成

端艇部

総合準優勝！

8月8から9日にかけて戸田漕艇場にて東医体ボート競技が開催された。男子シングルスカルでは扇原優君（2年）が見事優勝を果たし、男子ダブルスカルでは扇原（2年）・福王（6年）のペアが準優勝となった。さらに男子舵手付きフォアでは森本（3年）・岩崎（2年）・小川（3年）・藤井（3年）・竹内（4年）のクルーで準優勝を収め、総合準優勝に輝いた。

端艇部は、かつて東医体4連覇を達成するなど高い実力を誇っていたが、コロナ禍の影響により存続の危機に直面した。しかし、部員たちは着実な努力を積み重ね、部員数を増やし、今回の成果へと結びつけた。主将の森本直樹君（3年）は次のように述べている。

「2年の扇原を中心に、2・3年の主力メンバーが全力を尽くし、今回の結果を得ることができました。6年の福王さんは当初出場予定ではありませんでしたが、多忙な中練習に参加され、その姿勢に大きな刺激を受けた部員も少なくありません。来年の優勝を目指すには依然として厳しい状況ですが、今後も一日一日を大切に練習を重ねてまいります。」

一時は存続が危ぶまれた端艇部であったが、困難を乗り越えて成果を挙げた姿は、部の歩みを示す大きな節目となった。今後のさらなる活躍が期待される。

（5年　梅原千里）

東医体準優勝を遂げた後の集合写真

最重要の男子舵手付きフォア決勝

ヨット部

団体準優勝！

8月7日から10日にかけて、神奈川県・江ノ島ヨットハーバーで東医体ヨット競技が行われ、慶應義塾大学医学部ヨット部は団体準優勝を果たした。個人戦でも渡辺・大野ペアが優勝、阿部・松尾ペアが3位に入るなど健闘を見せた。参加艇数は2艇と少なかったが、圧倒的なボートスピードで存在感を示した。

主将・阿部太洋君（4年）は、「最終レースで大きく崩れ、日本医科大学に逆転を許してしまったことが悔しいです。厳しい結果となりましたが、この悔しさを糧に来年は優勝を目指します。」と語り、雪辱を誓った。今後の活躍にも注目が集まる。（5年　梅原千里）

渡辺大野ペアの上レグ

好スタートを切った阿部松尾ペア

水泳部

男子総合第3位

8月6・7日、東京アクアティクスセンターで行われた水泳競技では、男子総合第3位を獲得した。400m・800m自由形で由良弘二朗君（5年）、50m・100m背泳ぎで鷺見祐介君（4年）がそれぞれ二冠を達成する快挙を成し遂げた。さらに、牧野誠久君（3年）や田中康貴君（2年）が個人種目でメダルを獲得し、丸山陽平君（主将・4年）や出口莉沙君（3年）も入賞を果たすなど、多くの選手が活躍した。リレー種目は年々レベルが上がっており、順位を昨年より落としたものの、男子800mフリーリレーで第3位、400mメドレーリレーで4位と健闘を見せた。主将の丸山君は「活気ある応援と感動的なレースに背中を押され、チーム全員が強い一体感をもって最後まで戦い抜くことができた。他大学の層の厚さや予想を超える成長に食らいつき、男子総合3位という結果を収められたことを誇りに思う。昨年は手が届かなかった金メダルを複数獲得できたことは、来年度以降〝水の王者・慶應〟の復活を目指すうえで力強い狼煙となった」と語った。優勝には届かなかったものの、強豪・水泳部の今後の活躍に期待したい。

（6年　伊庭　知里）

男子総合第３位

ゴルフ部

男子団体3位

令和7年8月4日～9日にゴルフ競技の東医体が開催された。男子は東医体4連覇、女子は前回のリベンジとして団体入賞を目指し戦略を練り、「一打を削る」をモットーに日夜練習に励んできた。主将の川原君は実績豊富の上級生と新進気鋭の下級生と相扶けてこれが発展を第一となしチームの編成を行った。

男子個人では川原蒼平君（4年）、平宙訓君（5年）、蓑輪亮志君（5年）が5位、9位、12位と好成績を残し、女子個人では中島緋紗美君（6年）が4位入賞と有終の美を飾った。特に中島君は初心者はじめながら以前主将を務めその戦う背中は常に部員の感奮するところとなり部の発展に大きく寄与した。

団体戦では苦戦したところもあり当初の狙い通りにはいかず悔しさも残る結果となったが男女ともに大きな教訓を得て学びを次に生かす好機となった。川原君はまず10、11月に控える全医体と秋大会で今回の雪辱を晴らすべく部員一丸となって努力していくと力強く語った。

（5年　上野　悟）

ゴルフ部員集合

ハンドボール部

無念の3位、次に向けての一歩

ハンドボール部の大会は8月4日から8日までの5日間、キッコーマンアリーナとウイングハット春日部で行われた。前人未到の東医体三連覇を目指したチームだったが、惜しくも夢は届かず、三位という結果に涙をのんだ。

昨年までの主力が引退し、新たに1年生を迎えて刷新したチームは、今年も順調に勝ち進み準決勝で信州大学と対戦。試合は激しい攻防の末、同点で後半を終え、7mスローコンテストにもつれ込んだが、あと一歩及ばず敗戦となった。選手たちは肩を落とし、試合後のベンチには重苦しい空気が漂った。

それでも気持ちを切り替え、翌日の三位決定戦では科学大学に勝利。強豪・三四会ハンドボール部らしい強靭なメンタルを見せつけた。惜しくも王座から遠ざかったものの、大城揮輝君（3年）が4試合で22得点を挙げベストセブンに選出されるなど、個人としても大きな存在感を示した。大城君は「準決勝は悔しい一戦だったが、秋季大会に向けて意味のある経験になった」と振り返る。

部員たちはこの悔しさを糧に、秋季大会で王者奪還を目指してさらに練習を重ねていく。

（2年　近藤至恩）

６年生酒井隆玖のシュート
（３位決定戦 vs東京科学大）

ハンド部会長、内視鏡センター長・教授 加藤先生と。内視鏡ポーズで

各部の活躍ぶりを写真で紹介

サッカー部
常勝軍団

女子バレーボール部
決勝トーナメント進出！

剣道部
躍進

バドミントン部
力戦奮闘

軟式庭球部
全身全霊

空手部
来年も頑張ります！

バスケットボール部
全身全霊！

馬術部
部員一同頑張りました！

6年ぶりに四谷祭開催

ご寄付のお願い

2025年度四谷祭実行委員長の、本塾医学部６年（105回生）の賀久登仁と申します。2019年度を最後にCOVID-19の影響で中止が続いていた四谷祭を、2025年10月４日（土）・５日（日）に６年ぶりに開催する運びとなりました。今年度のテーマは「シン・四谷祭」で、先輩方が築かれた伝統を受け継ぎつつ、薬学部とも連携し、進化した四谷祭を目指して準備を進めております。

しかし、長期にわたる中止による資源の枯渇や物価高騰の影響で、運営資金が非常に厳しい状況です。つきましては、OBOGの皆様に心よりご寄付のお願いを申し上げます。ご支援を賜れる場合は、下記口座へお振込みをお願い申し上げます。

また、感謝の意をお伝えしたく存じますので、恐れ入りますが添付のQRコードのご入力もお願いいたします。寄附金控除についても、QRコードよりご案内致します。ご不明点がございましたらお気軽にご連絡ください。当日、信濃町で皆様にお会いできるのを心より楽しみにしております。

【口座情報】
銀行名：三菱UFJ銀行
支店名（店番号）：長原支店（119）
口座番号：1139048
口座名：慶應義塾大学四谷祭実行委員会
代表堺優真

KEIO UNIVERSITY Shinanomachi Campus
YO TSU YA FES.
2025.10.04 >> 05
KEIO UNIVERSITY Shinanomachi Campus

NOTICE
慶應義塾医学部新聞のメールアドレスが新しくなりました
shinbun@sanshikai.jp

鑑識知来

1950年代に開発され、軟性管の先端に小型のカメラと電球を取り付けた「光る壁画」であった「胃カメラ」は、光ファイバーの技術を応用した「ファイバースコープ」により、胃の中をリアルタイムで観察できるようになり、その後、挿入部の先端にCCD（撮像素子）を組み込んだ「ビデオスコープ（電子スコープ）」が開発され、画像を電気信号に変えてモニターに映し出すことが可能になった。ちょうどその頃、私はこの内視鏡と出会い、四半世紀が過ぎた。現在では、さらに内視鏡は進化し、もはや壁画ではなく、リアルタイムに顕微鏡レベルの観察を行うこともできる。

近年は内視鏡領域においてもAIの開発が進んでおり、画面上に四角い枠が現れ、ポリープを指し示し見落とし防いだり、さらに、指摘したポリープを悪性かどうか判断するAIも現れている。内視鏡診断におけるAIは、若手内視鏡医の経験や判断力を補うだけでなく、エキスパートにとっても第二の目としてサポートしてくれる役割を担っている。

AIは与えられ学習したデータの質と量に縛られ、想定外の病変には戸惑うことがあり、医師の最終判断は必須である。しかしながら、見落とし不安が減ることは患者にとって大きなメリットである。医師にとっても「もう一つの眼」を持つことで、診断の精度と自信が高まる。それは、これまで人間が担ってきた「見つける」という役割をAIと分かち合うことで、医師が「考える」「判断する」「寄り添う」という、より人間らしい役割に集中できる未来を拓く第一歩なのだ。

AIは、私たちの未来を脅かす存在ではなく、共に歩むパートナーとして、医療の新たな領域を切り拓いていく。この新たな共生は、私たちの健康を守るための、心強い味方となるだろう。

（予防医療センター　細江直樹　76回）